



埼玉県農業協同組合中央会会長賞

# ご飯で咲かせよう、笑顔の花

深谷市立岡部西小学校 四年

久保 奈央

「ごはん、たいてみる？たき方を教えるよ。」

思いがけない母からの提案だった。私はうれしさでむねがいつぱいになった。母は最近忙しく、私が眠った後に帰宅する日も多かった。母がいない食卓は火が消えたようにさみしいが、それが当たり前毎日になっていた。

私は白いごはんが好きだ。かぜをひいた時のおかゆ、たくさん運動してへとへとなった時の山もりごはん、三時ごろちよっとおなかのすいた時のおにぎり：私のそばにはいつも白いごはんがある。そんな大好きなごはんを母と一緒にたくのだ。なんて幸せなんだ！

「うん、たこうたこう！」

私ははずんだ声で答えた。ボールに米を入れると、さらさらさら：ときれいな音がした。手を入れると米が優しく私の手を包みこんだ。かたい米のつぶが、ねばり気のあるごはんに変身するなんて、信じられなかった。「見ててね。」

母はボールに水を入れ、やさしく米を回して軽くおした。何度かくり返すと、ボールの水がにごってきた。そして、とぎ汁をすてた。

「はい、やってみて。」

ボールを受け取り、心ぞうがドキンと鳴った。大事なお米をおいしくとぎたい。しん重にボールに水を入れた。それから、こわごわと手で水を回し始めた。

「あんまり強くおすと、米の形がこわれちゃうから、やさしくおしてあげて。」

夢中になりすぎて、うなずくだけでせいっぱいだった。とぎ汁をすてようとした時、

「あ！」

サバツと米がシンクにおちてしまった。ていねいにボールをかたむけたのに…。

「いいよ、いいよ。大丈夫。」

母は落ちた米をささっと拾い集めてボールにもどし、にこっと笑った。私もつられて笑顔になった。水のにごりが取れたころ、かまに米を入れた。一つぶ残さずていねいに。

「3つてかいてある所まで水を入れてね。おいしくなあれ。」

二人で一緒に炊飯のボタンをおして、休けい。テレビを見ている炊飯器が気になり、何度も台所をのぞきに行った。

「ねえ、あと何分くらいで炊けるの？」

「ねえ、すごい湯気が出てきたよ！」

「あと七分って表示が出たよ。」

わくわくしているも立ってもいられなかった。

「奈央ちゃんの実況は楽しいねえ。」

母は、のんびり答えた。軽快な音楽がなり、ご飯がたけた事を知らせてくれた。炊飯器のふたをあけると、白いゆげの向こうにつやつや輝くごはんが見えた。炊きたてのごはんを口に入れると、もちっとした食感。かみしめると、甘い味が口に広がった。母と一緒に炊いたご飯、なんておいしいのだろう！いつもの百倍はおいしかった。私は決めた。ご飯をおいしく炊いて家族に笑顔の花をさかせると。